戦争と平和特集

未来への伝言

～あの日の声が聞こえますか～

終戦から66年。
年月とともに身近にいる戦争体験者は姿を消していきます。彼らの体験した戦争の事実は、次世代に受け継がれているのでしょうか。
今回は、次世代を担う高校生が、実際の戦争体験者と「戦争と平和」について語り合います。
皆さんも戦争のこと、平和のことをもう一度考えてみませんか。

市立博物館歴史民俗資料館「戦争とくらし」コーナー：
戦争をテーマとした実物資料などを展示しています。

アンケートによる検証

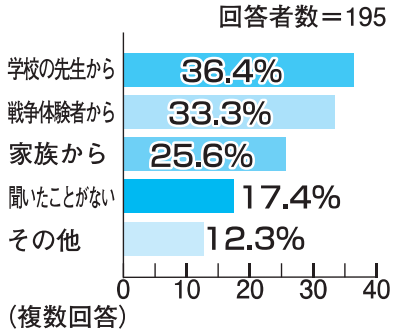
戦争に関する意識調査

富士市立高校1年生195人に、戦争に関するアンケートを実施しました。
平成に生まれた高校生は、昭和に起きた戦争をどうとらえているのでしょうか。高校生の本音に迫ります。

戦争に関する知識

Q 戦争に関する実話を聞いたことがありますか。ある場合はだれからですか。

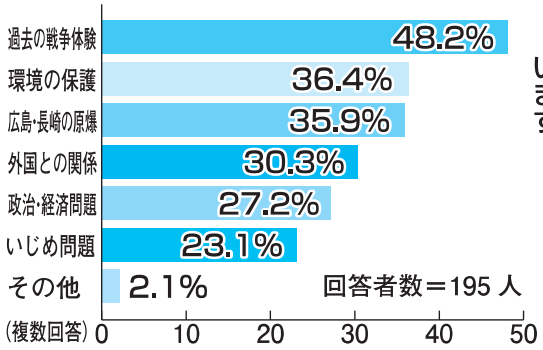
A 約36％の生徒が学校の先生から聞いています。



アンケートに回答した生徒のうち、戦争に関する実話を「学校の先生から」聞いたと回答した生徒は約36％を占めています。
この値は、「戦争体験者から」、「家族から」と回答した数を上回り、最も多くなっています。

Q 平和な社会をつくるために、学ぶ必要があると思うことは何ですか。

A 約48％の生徒が「過去の戦争体験」だと回答しています。



座談会～戦争体験者と高校生が語り合う～

命の尊さを学ぶとき

7月15日に富士市立高校1年生6人が、戦争体験者である橋口傑さんと沖縄戦の取材活動をしている山﨑ひろみさんとともに、市立博物館歴史民俗資料館「戦争とくらし」コーナーを訪れ、焼夷弾や満州開拓義勇軍の写真などの展示を見学しながら、当時の様子を学びました。

その後高校生6人は、稲垣家住宅で橋口さんと山﨑さんを交えて、戦争と平和について語り合いました。

広見公園　稲垣家住宅

戦争の事実を知ることは怖いこと、でも知っておかなければいけないこと

戦争がもたらす悲劇

橋口―皆さんは今、学校にお弁当を持っていっていますか。

高校生一同―はい。

橋口―戦争中は、働き手がみんな軍隊に入ってしまって、学校へお弁当を持っていくことができないくらい、どんどん食糧がなくなりました。当時、1か月も2か月も、まともな食事が食べられないときがありました。そうすると小さな子どもたちから、栄養失調で亡くなっていきました。夜に生きていても、朝になると冷たくなって死んでいることもよくある出来事でした。それくらい食糧がなかったのです。

橋口―皆さんは何歳ですか。

高校生一同―15歳か16歳です。

橋口―私は14歳で満州開拓義勇軍として中国へ戦争に行きましたが、皆さんは行けと言われたら行きますか。

齋藤―当時だったら、行くように教育されていただろうから、怖いけど行ったと思います。

齋藤遼さん

橋口―確かに満州へ行った最大の原因は当時の教育にあるけれど、もう一つ理由があります。それは、一人でも家族が

座談会参加者

橋口傑さん：戦争体験者（「富士の語り部」の会）

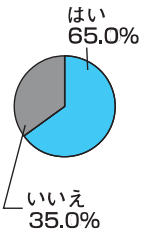
山﨑ひろみさん：核兵器廃絶平和富士市民の会

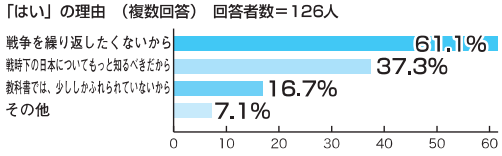
富士市立高校1年生6人

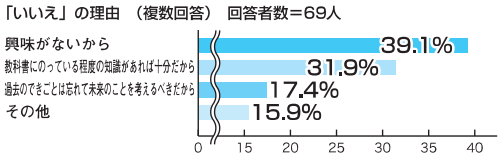
過去の戦争への関心

Q 日本がかかわった過去の戦争について、あなたはもっと知りたいと思いますか。

A 約65％の生徒が「もっと知りたい」と回答しています。







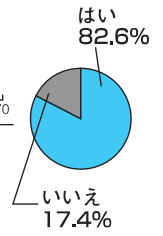
「もっと知りたい」と回答した理由の大半は、「戦争を繰り返したくないから」との回答でした。

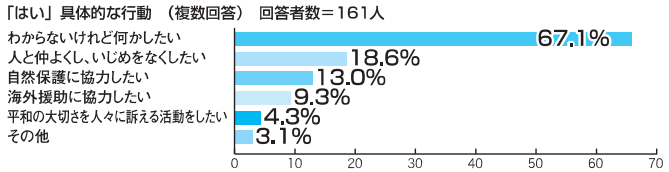
一方、「知りたくない」と回答した理由は、「興味がない（約39％）」、「教科書にのっている程度の知識で十分（約32％）」、の順でした。

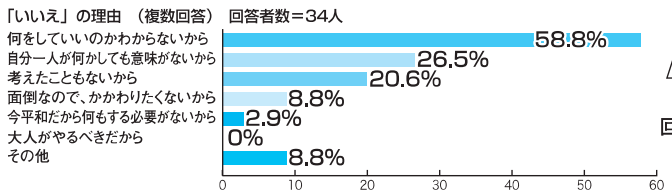
平和への意識

Q 平和のために何かしたいと思いますか。

A 約83％の生徒が「何かしたい」と回答しています。







「何かしたい」と回答した生徒の約67％は「わからないけれど何かしたい」と回答しています。

一方、「何かしたいと思わない」と回答した生徒の約59％が「何をしていいのかわからないから」と回答しています。

減れば、家計が楽になると思ったからなのです。

そして私は16歳のときに、初めて人を撃つ戦場に行きました。そこは、四方八方で血まみれになった人たちがのたうちまわり、だれしも一秒先の命すらあるかどうかわからない状況でした。遠くで大砲や鉄砲の音が聞こえてくると、怖くて足が震えました。私はそのような戦場に30回以上行きましたが、何回行っても恐怖で足が震えました。それでも銃弾が間近まで飛んでくるようになると、あきらめがついて、足の震えはとまりました。

竹平―どんな人にも家族や友人がいて、だれかにとって大切な人なので、死んでいい人なんていないと思います。それなのに、戦争によって命を奪われてしまうのはよくないことだと思います。

竹平琴美さん

橋口―人の命を奪うことがよくないことだと皆さん理解してくれていますね。命は国籍に関係なく、どんな人にとってもかけがえのないものだと心にとめておいてください。

では、9月18日が何の日か知っていますか。

高校生一同―…。（沈黙）

橋口―この日は、満州事変の起きた日です。中国では小さな子どもでも知っている日ですが、日本人は、ほとんど知りません。戦争では、日本の兵隊も一つの街を占領するために、小さな子どもまで殺してきた事実があります。戦争を学ぶときには、日本がされたことだけでなく、したことも含めて、両方から物事を見て、日本の立場を考えてほしいと思います。それが戦争の事実なのです。

皆さんは自決という言葉を知っていますか。当時、日本人は戦場で、もうだめだ、と思うとみずから命を絶ちました。それを自決と言います。日本人は、戦場に行って死ぬことは名誉であり、絶対に捕虜になってはいけないと教えられていたのです。

山﨑―同じ教えにより、沖縄戦でも、親が子どもを殺したり、夫が妻を殺したりと、たくさんの悲劇がありました。

渡邉（安）―当時は、捕虜になるくらいなら死になさい、という考え方が正しかったのかもしれませんが、今の私たちからすると、個人の命が大切にされていないようでひどいと感じました。

教科書だけではわからなかったこと

戦争の事実を学んで

渡邉（弦）―教科書や授業では、「戦争」という出来事しか習わなかったけれど、僕たちが知っておくべきことは、なぜ戦争が起きてしまったのか、そしてその戦争によって、国内外の人がどのような生活を強いられたのか、という事実なのだということがわかりました。

渡邉弦太さん

竹平―戦場以外で、たくさんの人が飢え死にした事実は知りませんでした。食べられなくて苦しんで死ぬことはつらいし、戦争とは無縁な小さな子どもが犠牲になっているということも、教科書だけではわかりませんでした。なぜ戦争中は、そんなに人を殺すことができたのでしょうか。

山﨑―戦争中だから平気で人を殺すことができたと考えてしまうかもしれませんが、兵士になるための訓練を受けることで人は人を平気で殺すことができるようになることもあります。感情が麻痺して、戦争ロボットになってしまうのです。

渡邉安理さん

当たり前の日常を送ることができる幸せ

平和を感じる価値観

片又―戦争体験を聞く前は、好きなことができてみんなと楽しく過ごせることが幸せだと思っていました。でも、今は命を落とす不安がないというだけで幸せを感じられます。

片又千尋さん

嶋岡―餓死する心配もなく、食べたいときに食べたい物を食べることができ、こうして当たり前の日常を送ることができる毎日がどれだけ幸せなのかを実感しました。

嶋岡将太さん

山﨑―皆さんが平和だと感じている状態を、どうしたら維持することができるのかを考えてみてください。平和な社会をつくるためには、自分たちがどのような社会に生きているのかを知る必要があります。だからこそ戦争体験者の話を通して、過去に日本がどんなことをしたのか、されたのかという正しい事実を知ることや、みずからのアンテナを高く持って、世界中の情報を得ることで、正しく判断できる力を養ってほしいと思います。正しく判断する力は、皆さんが大人になったときに戦争を

防ぐ大きな力になるかもしれませんよ。

橋口―兵隊はロボットと同じで、自分の意志で動くことはできませんでした。でも皆さんは違います。これからもし戦争が起きそうになっても、自分で善悪の判断をして嫌なものは嫌だと言ってください。そうしないと、また戦争は繰り返されてしまいます。それだけは絶対に避けたいことなのです。

命を大切にしたい　だから戦争はしたくない

私たちができること

橋口―アンケートの質問にもありましたが、皆さんはこれから平和のためにどんなことをしようと思いますか。

齋藤―たくさんの人が死に、自分の年齢でも兵士にならなければならない戦争は、絶対に繰り返したくないと思いました。僕は、将来自分のことだけを考えて争いの原因をつくるような人間にならないようにしたいです。

嶋岡―きょうはふだん聞くことができない貴重な話を聞くことができて、勉強になりました。僕は、時々ちょっとしたことで腹が立ってしまうことがあるので、そういった一時の感情に流されない穏やかな人間になろうと思います。

渡邉（弦）―今まで戦争はゲームの中の出来事でしたが、きょうの話を聞いて、今までよりも戦争の様子が実感できました。殺したり殺されたりする戦争はとても怖いし、絶対にしてはいけないといつも心にとめておこうと思いました。

渡邉（安）―戦争をしてたくさんの人を殺すと、自分の国では英雄になれるかもしれないけど、それはすごく最低なことだと思います。私は日常で、軽々しく「殺す」とか「死ぬ」とか口にしていましたが、そうした命にかかわる言葉を軽々しく使わないようにしようと思います。

富士見大通りにある
核兵器廃絶平和宣言塔

竹平―戦争体験者の話は怖いところもありましたが、その事実をしっかりと受けとめて、「戦争をしない」と勇気を持って人に伝えられるようになりたいです。

片又―人の命を簡単に奪ってしまう戦争はやはりいけないことだと思います。将来子どもができたら、きょう聞いた戦争のことを伝えていきたいと思いました。

山﨑―絶対に戦争をしてはいけない、という皆さんの話を聞いて、とても心強く感じました。

橋口―皆さん、戦争に反対だと言ってくれましたね。すごく立派なことだと思います。言葉にして人に伝えることは、とても勇気のいることですが、「私は戦争に反対です」と言える大人になってください。

戦争の事実を共有するために

戦後生まれの私が戦争の事実を伝えるようになったきっかけは、広島や長崎、特に沖縄の戦争の現場を訪れたときに、まだまだ戦争の事実が知られていないことに衝撃を受けたからです。

今は沖縄をはじめ各地の戦跡をめぐり、戦争体験者に直接話を聞き、戦争の事実をたくさんの人に伝えたいと思っています。

正確な情報を共有するためにも、戦争体験者の話が世代を越えてこれからも伝わっていくといいですね。

核兵器廃絶平和富士市民の会
山﨑　ひろみさん（川尻）

命ある限り伝えたい

私はことし85歳になりました。戦争体験者は高齢化が進み、次々にこの世を去っていきます。どうやってこの戦争体験を途切れることなく、次世代に引き継いでいけるのか、ということが私の一番の悩みなのです。

私は、命ある限り戦争体験を語り継いでいきたいと思っています。

たくさんの人が、平和について考えるようになれば人や地域のために助け合う、争いのない世の中になるのではないでしょうか。

「富士の語り部」の会
橋口　傑さん（今泉）

大切なことは知識や情報、数字や活字だけではなく、感情がなければ伝わりません。だからこそ、戦争体験者の話は、たくさんの人の心に響き「戦争を繰り返してはいけない」という強い思いを残していきます。

それは現在から未来へ途絶えることなく続く伝言なのです。